明治百年記念芸術祭参加

日本音楽集団
第8回定期演奏会

〔演奏〕 日本音楽集団

〔客演〕 日野てる子・荒木宏明・芝　祐靖・尾崎太一

〔特別提携出演〕 日本合唱協会

ENSEMBLE NIPPONIA

The 8th Regular Concert

Nov. 13th 1968

6:30 p.m.

at ASAHISEIMEI HALL

―― 曲目と出演者 ――

1. 尺八三重奏曲 ／ 清瀬保二

宮田耕八朗・古賀将之・横山勝也

2. 日本楽器のための二つの楽章 ／ 元橋康男

坂井とし子（箏）・野坂恵子（箏）・白根きぬ子（箏）・宮本幸子（十七絃）
杉浦弘和（三絃）・山田美喜子（琵琶）・向山英一郎（篠笛）・宮田耕八朗（尺八）
古賀将之（尺八）・横山勝也（尺八）・田村拓男（打楽器）・清水義矩（打楽器）
横山千秋（指揮）

3. 日本民俗詩より「恋の歌」 ／ 長沢勝俊

日野テル子（アルト）・荒木宏明（バリトン）・・・・客演
向山英一郎（篠笛）・田村拓男（打楽器）・清水義矩（打楽器）・**尾崎太一**（打楽器）

―――――――（休　憩）―――――――

4. 箏四重奏曲 ／ 長沢勝俊

白根きぬ子（箏）・坂井とし子（箏）・野坂恵子（箏）・宮本幸子（十七絃）

5. はばたきの歌 ／ 三木　稔

（詩は秋浜悟史の戯曲「アンティゴネーごっこ」および「幼児たちの後の祭り」より）

野坂恵子（箏, 三絃）・坂井とし子（箏, 三絃）・白根きぬ子（箏）・宮本幸子（十七絃）
杉浦弘和（三絃）・山田美喜子（琵琶）・向山英一郎（篠笛, 能管）・古賀将之（尺八）
宮田耕八朗（尺八）・横山勝也（尺八）・田村拓男（打楽器）・清水義矩（打楽器）
芝　祐靖（竜笛）・荒木宏明（バリトン）・・・・客演
日本合唱協会（混声合唱）・・・・・・・・・・・特別提携出演
横山千秋（指揮）

—— PROGRAMME ——

1. TRIO for SHAKUHACHIS / YASUjI KIYOSE

by K. MIYATA M. KOGA K. YOKOYAMA

2. Two Movements for Japanese Instruments / YASUO MOTOHASHI

by T. SAKAI K. NOSAKA K. SHIRANE S. MIYAMOTO
H. SUGIURA M. YAMADA E. MUKŌYAMA K. MIYATA
M. KOGA K. YOKOYAMA T. TAMURA Y. SHIMIZU
C. YOKOYAMA

3. Song of Love / KATSUTOSHI NAGASAWA

by **T. HINO** **H. ARAKI** E. MUKŌYAMA T. TAMURA
Y. SHIMIZU **T. OZAKI**

—— Intermission ——

4. Quartet for Kotos & Jūshichigen / KATSUTOSHI NAGASAWA

by K. SHIRANE T. SAKAI K. NOSAKA S. MIYAMOTO

5. Ballade for Winging / MINORU MIKI

Poem by Satoshi Akihama

by K. NOSAKA T. SAKAI K. SHIRANE S. MIYAMOTO
H. SUGIURA M. YAMADA **S. SHIBA** E. MUKŌYAMA
M. KOGA K. MIYATA K. YOKOYAMA T. TAMURA
Y. SHIMIZU **H. ARAKI** **JAPAN CHORAL SOCIETY**
C. YOKOYAMA

尺八三重奏曲

第一楽章　アレグロ　ノン　トロッポ
三部形式
短かいコーダがつく。

第二楽章　レント
やや伝統的な感じの主題とその発展。

第三楽章　第一楽章よりやや早い。
三部形式

3本の尺八のために作曲され，1964年5月，東京尺八三重奏団によって初演された。又同年秋の当集団第一回演奏会にも再演されている。曲は上記三楽章からなり，いずれの楽章にも五音音階（陽旋法）が用いられている。

日本楽器のための二つの楽章

現代の音楽に対比する形で，日本の古典音楽の形を示し，その両者の接点を探ろうという一つの問題を作曲者は提起している。二つの楽章は共に緩急の変化を内包している。

日本民俗詩より「恋の歌」

（NHK委嘱作品）

この曲は女声および男声の曲がそれぞれ2曲，それに女声と男声の2重唱が一曲，計五曲よりなる恋の歌です。伴奏には，篠笛と八種類の打楽器がつかわれています。日本民謡のなかにある恋の歌は，その殆んどが労働歌として歌われてきたものであり，恋愛を一つの遊戯として扱ったものはあまりみあたりません。ここに歌われている歌は，表現としては，すでに古い部分も沢山あります。しかしそのなかには現代にも充分通じる恋のよろこびや，悲しみが真実きらりと光るすばらしい表現をあたえられて私を感動させてくれます。

新しい日本の歌をつくるにはいろいろな方法があるでしょう。私は私なりにこの素朴な真実を素材とし，篠笛と打楽器という単純な楽器の伴奏により現代にも通じる恋の歌を書いてみたかったのです。

長沢　勝俊

十七見初（さだ）めるにや
あおの高嶺（たかね）の石のかげ
石に口なし　見初（さだ）めたな

見初（さだ）めたな
あまり愛（め）ごさに口吸（くちす）れや
飴か甘草（かんぞ）か　夏梨（なつなし）か

夏梨か
秋が山のこかの実か
一夜づくりの　甘酒か

君さまは　高いところの姫小松
わたしゃ谷間のつたかずら
きりきりしゃんとね
きりしゃんと巻きついて
はなしがしてみたい

思てかよえば
千里も一里よ
逢わずもどれば　また千里よ

こなた思えば
野も瀬も山も
やぶも林も　知らで来た

様（さま）に貰（も）ろうた
根付（ねつけ）のかがみ
見れば恋増す　思い増す

いとし殿御に　貰ろうたものはの
親にはかくしたし
見ても　見ても　見たしの
見ても見たいは　殿御のみやげ

十七が　しのびの殿御に帯もろて
晴れてはしられの　しのび帯
帯はもろうたが　しのびの帯で

月は東に
すばるは西に
いとし殿御は　まんなかに

箏四重奏曲

（NHK委嘱作品）

箏三面と十七絃一面とからなる四重奏曲です。日本音楽集団のアンサンブルのなかで，箏を使っていつも感じること，それは箏の十三音という音の少なさと音色の変化のなさです。勿論独奏楽器としてみた場合，この楽器はそれなりに完成されたものであり，独特の表現をもっています。しかし一たび合奏となった場合その独特のこまかい表現が充分いかしきれず合奏としての興味を持続させることが大変困難です。この四重奏曲に於ては伝統的な箏の技法にはあまりとらわれず自由な合奏の面白さをねらうと同時に，合奏に於ける新しい表現を追究してみました。　　長沢　勝俊

はばたきの歌

最初に，この面倒な曲への参加をいとわなかった演奏の同人のみなさんにお礼を言わねばなりません。そして芝さん，荒木先生は勿論のこと，特に金銭関係を無視して私達と共通の目的に奉仕して下さった日本合唱協会に脱帽します。

この曲の後半の声楽部分に使用する詩を書いてくれた秋浜悟史が酒を飲みながら言ったことがあります。どうして作曲家は勇気もなく開き直ることもできないくせに判らないものばかり書くんだ——。僕は一瞬鼻白んでお前たち演劇人や詩人の方だってそうじゃあないかと言い返そうとしました。全く現代の芸術は狂気の沙汰です。他人に解読不能の感覚だけの仕事が溢れ，前衛的といわれる音楽にしてもその退潮と頽廃は他のジャンルからの鋭い眼には耐えられぬものなのでしょう。

かといって僕たちが平易で楽天的な様式に後向きに歩みはじめられるものでもありません。

さて秋浜に言い返すことをさておいて，僕はこの詩の中に一つの方向を探ることが出来そうに思えました。ここには感覚オンリーを排し，明確な論理と抒情に支えられた不思議にプリミティヴな土の根の魔力があります。

この集団での仕事の中で，僕はさまざまな試み——具象的で健康であったり，抽象的な日本の精神におんぶしたりしてみました。常に逞しく激しくあろうとはしました。併しあまりにも過去にのみ基盤を持つ日本の楽器を意識してか，今日僕たちを迎えている一種のSturm und Drang（疾風怒濤）の時に立ち向う発言を避けて来たようにも思えます。音楽とは本来そのようなものにかかわりがないと自ら思い込ませていたふしがあります。

ここへ来て何か我慢がならなくなりました。怒るべき時には怒って，マイナスの流れをただす反体制運動に組し，本当の前衛の旗手の仕事を探ろう。秋浜の言うように，あしたのために今日をごまかさないで行こう。

ただ，その目的のために，僕は一つの音楽作品にとって侵すべからざるタブーともいうべき様式の混淆を敢て行わねばなりませんでした。百年前までこの国に漂っていた伝統という名の空気の罐詰めによっても勿論今に呼吸することは出来ます。併しこの百年の欧化の結末である亜硫酸ガスから口を覆って逃れることも出来ませんでした。

だから——この曲は「怒り」のパターンに先導されて，その「とむらい」そして明日への「はばたき」を願うという，一見スノブとみまがう発想から出発します。　　三木　稔

1.

死んだらそれでおしまい
いなくなったあなたに
眼を忘れたあなたに
もうさよならのあいさつはしない
けっしてふりむいてはあげない
死んだらそれでおしまい

あなたに羽根が生えようなら
むしりとってやる
ちぎりとってやる
死んでもそばを離れまい
ウソだもちろん
まさかまさかまさか
だれが泣いてやるものか
死んだらそれでおしまい
ためらいもなくそれでおしまい

ああそれが辛いなら
復讐の朝に見舞われたくないなら
せめて片眼はあけていておくれ
死んだふりはしないでおくれ
いとしい人よ

2.

いとしい人よ
ぼくにも小さな羽根が生えてきたようだ
湿ってくやしい悲しい羽根だけど
小さな羽根のまばたきで
あなたの空へ飛び立とうと
ぼくはつんのめり走りつづける

小鳥たちよ
ぼくの体の重みを
そんなに陽気にいそがしく
笑わないでおくれ
なぐさめないでおくれ

いとしい人よ
ぼくはもう気がちがいそう
のろいの羽根をひきぬいて
おのれの眼へ突き刺すんだ
痛みの涙をガソリンにして
眼に生えたとげとげしい羽根よ
あなたの空へぼくをはこんでおくれ

3.

やがては
はばたきだ
それまでは
眼をあけっぴろげに
ひらいてはいけない
ひらいてはいけない

やがては
はばたきだ
眼の裏へ潜りこめ
がまんしてがまんして
やがては
はばたきだ
なるほど
大切な仕事ほど
あとまわしだ

やがては
はばたきだ
あきらめきれぬことは
あきらめきれぬこととして
あきらめきれぬままに
けっして切れぬように
あきらめきるな

やがては
はばたきだ
明日(あした)のために
今日をごまかすな
流れているはずの
赤い血を忘れるな
思い起こせ
吹き鳴らせ
血まみれの口笛

やがては
はばたきだ
ひらいてはいけないが
とじてもいけない
とじてもいけない
薄眼をあけて
あるいはするどく
あるいはやさしく
あるいはこざかしく
するどくやさしくこざかしく
素顔をさらそう

それが素顔だと
やがては
はばたきなんだから

秋浜悟史の戯曲
「アンティゴネーごっこ」
「幼児たちの後の祭り」より

同人の発言

野坂恵子

私たちが祖先から受け継いできた伝統邦楽は，まだ特殊の世界として受け取られがちです。

最近，小学校でも音楽の授業に邦楽のレコード観賞が行われていますが，子供たちは30分，40分もの曲のサワリを聞かされて，声の出し方，音色の余りの違いにまず吹き出してしまうそうです。

古典邦楽の持つ，間，空白，不合理性，繊細で優美なあの感情，そして二重三重に包まれた中で燃えている炎——，又邦楽器の持つ決定的な音色と奏法——。これらの特性はもはや現代人にとって全くの別世界となってしまってよいものでしょうか。私は，現代音楽の新らしい指標の要素が，この私たちの邦楽の世界に含まれているのではないかという気がしてなりません。

只，現代の作曲家たちが，往々にして，音色がめずらしいというだけで，効果音的に邦楽器を用いているのに出会いますが，演奏者としては常々，残念に思っています。生半可な新曲を弾くよりも，古典の方がずっと手ごたえがあるじゃないか，という説にもうなづけるのです。

反対に，演奏者も，作曲者に答えられるだけの準備が常になされていないといけませんが，そのためには，楽器の検討，演奏法の改善等，色々な問題が残っているようです。

古典の世界を極めていくのも，実際一生かかっても完成しない程奥行の深いものでしょうが，一方このめまぐるしい世の中，人と人がぶつかり合って生きていく中で，もみくちゃになっても尚，枝を一杯に拡げよう，——こんな意識の中で，ともかく少しづつ明日を目指して仲間同志力を合わせ“私たちの音楽”のために愛情と情熱を捧げるつもりでいます。

田村拓男

現代人である我々が，我々の手で我々の音楽を新しく作りたいと思うのは当然の欲望である。先人の作ったものをただ再現するために存在価値があるというような演奏家では，それはそれなりに立派な芸術であるにしても何か物足りなさを感じる。演奏家が作曲家と共に音楽を作る苦労や，喜びを味わい，直接的に創作運動に加わることは，必要且つ有意義なことだと思う。

現代は分業の時代であるが，作曲家がいくら作曲して譜面にしても演奏家の協力がなければ，音にはならない。仮に作曲家が私費を投じて演奏家を集め音にしようとしても，創作運動に積極的な姿勢をもつ演奏家と一時的に金で買われた演奏家とでは出来上りの差は自明であろう。

演奏技術の練磨に時間の大半をさいている演奏家の側からしても新しい音の構築ということでは，それを専門にしている作曲家に協力を求めなくてはならない。しかしそれに見合うだけの謝礼は，一演奏家には，余程お金持でなければ無理である。又例えそれが出来たとしても，意見の交流がなく，一方的に終ることが多い。

そこで生れたのが日本音楽集団である。そこにはこれからの音楽は，かくあらねばならないという，確固たる自信にあふれた集団の推進役である作曲家と，積極的に創作運動に参加しようとしている演奏家がいる。当然そこでは，相互の融合が行なわれ，一つの目的に向って多大な成果が期待される。事実結成以来の五年間にも，ほのぼのとした光明を見つけられたような気がしている。素材を日本の伝統音楽の中に求め，又その血を受けついだ演奏家が，古くからの様式にとらわれず新しい世界を作り出す。我々日本民族の楽器による我々の新しい世界だ。ヨーロッパの新しい音楽が，行きづまりを感じているらしい中で，日本音楽集団の存在は，誠にユニークで，新しい音楽への指針を与えるものとなるのではなかろうか。

集団が結成されてから五年，そこで一演奏家として考えていることが一つある。

集団のカラーを固定させないためにも，より多くの作曲家の参加を呼びかけたい。それが出来ることにより，一層広がりのある活動が出来ると思う。

同人連名

(箏・三絃)	坂井とし子	(尺八)	古賀将之
(箏)	白根きぬ子	(打楽器)	田村拓男
(箏・三絃)	野坂恵子	(打楽器)	清水義矩
(箏・十七絃)	宮本幸子	(指揮)	横山千秋
(琵琶)	山田美喜子	(作曲)	三木稔
(三絃)	杉浦弘和	(作曲)	長沢勝俊
(篠笛・能管)	向山英一郎	(作曲)	元橋康男
(尺八)	横山勝也	(コンサートディレクター)	鞍掛昭二
(尺八)	宮田耕八朗	ゲストメンバー(竜笛)	芝祐靖

お知らせ

◉ 当集団では来年度の定期会員を募集しています。会場受付でお申込み下さい。会員になられた方には，来年度春秋二回の定期公演の際の座席確保のほか，いろいろなご案内を申し上げます。

◉ このたび当集団の外国呼称を ENSEMBLE NIPPONOS として発表いたしましたが，各方面のおすすめもあり，表記のとおり ENSEMBLE NIPPONIA と訂正することにいたしました。ご諒承下さい。

◉ これからの活動予告

★11月24日 22.15 p.m. NHK・FM(S)「現代の日本音楽」で長沢作品「箏四重奏曲」「子供のための組曲」を放送。

★11月29日 都市センターホールで石桁真礼生作曲，オペラ「駈込み」に出演。

★2月1日 NHKホールでの公開録音により三木稔作曲「くるだんど」を演奏（合唱：東京混声合唱団)。

★2月18日 東京文化会館での「現代の音楽展'69」に出演。三木稔作曲「古代舞曲によるパラフレーズ」全曲を演奏。

★6月10日 朝日生命ホールで第9回定期演奏会。

★10月31日 朝日生命ホールで第10回定期演奏会。

マネージメント　東京演奏家協会　Tel.：473－4413

日本音楽集団事務所　〒150 渋谷区神宮前3－6－14　Tel.：402－0709